

博士学位請求論文審査要旨及び担当者
報告番号 甲 乙 第 号

氏名 北村 直彰

論文題目 The Layers and Limits of Reality: A Metaphysics of Grounding and
Fundamentality (実在の階層と限界：基礎づけと基礎性の形而上学)

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授 岡田 光弘
文学研究科委員

副査 慶應義塾大学文学部教授 柏端 達也
文学研究科委員

副査 埼玉大学大学院 加地 大介
人文社会科学研究科教授

副査 千葉大学文学部准教授 秋葉 剛史

論文概要

本論文では、世界の階層構造の形而上学的説明で重要となる「基礎づけ (grounding)」概念が検討される。まず現代分析形而上学における基礎づけ概念研究の意義が確認される。次に、基礎づけ理論の内的整合性およびメレオロジーとの整合性を検討し、基礎づけ理論を擁護する。最後に、基礎づけ理論が truthmaker 理論に適用され、真理の实在論的基盤の説明の重要性が主張される。さらにこの立場で否定的真理の truthmaker についての論争に対して、新しい解決策の提案がなされている。

論文の構成は次の通りである。

Chapter 1 Introduction: Motivation and Aim

(第一章 序論：動機と目的)

1.1 The Layered Structure of Reality and Metaphysical Explanation

(実在の階層構造と形而上学的説明)

1.2 The Structure of This Thesis

(本論文の構成)

Chapter 2 A Neo-Aristotelian Conception of Metaphysics and Its Contenders

(第二章 新アリストテレス的な形而上学観とその対抗馬)

2.1 Neo-Aristotelianism and Quineanism

(新アリストテレス主義とクワイン主義)

2.2 Against Neo-Meinongianism

(新マイノング主義に抗して)

Chapter 3 Resolving the Paradox of Grounding

(基礎づけのパラドクスを解決する)

3.1 Paradoxes and Responses

(パラドクスと応答)

3.2 A Deflationary Metaphysical Interpretation of Factive Grounding

(事実含意的基礎づけのデフレ的形而上学的解釈)

3.3 Objections and Replies

(反論と応答)

Chapter 4 The Ground-Theoretical and the Mereological Hierarchy

(第四章 基礎づけ理論的な階層と部分-全体論的な階層)

4.1 From Fact Grounding to the Priority Relation Between Objects

(事実の基礎づけから対象間の優先性関係へ)

4.2 Tallant's Argument against Priority Views

(優先性主義に対するタラントの反論)

4.3 Against the Gunk Argument

(ガンクに基づく論証に抗して)

4.4 Against the Junk Argument

(ジャンクに基づく論証に抗して)

Chapter 5 In Defense of Truthmaker Theory

(第五章 真にするものの理論を擁護する)

5.1 A Realistic Conception of Truth and the Truthmaker Principle

(実在論的真理観と真にするものの原理)

5.2 Grounds of Truth and Truthmakers

(真理の基礎と真にするもの)

5.3 Truthmaker Theory as Fundamental Ontology

(基礎的存在論としての真にするものの理論)

5.4 The Possibility of Truthmaker Non-Maximalism

(真にするものの非全面主義の可能性)

Chapter 6 The Groundedness of Negative Truths

(否定的真理が基礎づけられているということ)

6.1 The Problem of Negative Truths: The Second Stage

(否定的真理の問題：第二ステージ)

6.2 Is Any Alleged Truthmaker for Negatives Explanatorily Deficient?

(否定命題を真にするものの候補として説明的に不適当なものはあるか)

6.3 The World as the Ontological Ground for Negative Truths

(否定的真理の存在論的基礎としての世界)

Chapter 7 Conclusion (第七章 結論)

各章の概要

第一章では、序論として、論文全体の動機と目的が述べられている。まず第一節では、実在の階層構造を哲学的に精緻化するものとして「基礎づけ」関係が導入されている。次に第二節では、この「基礎づけ」の問題に関して議論する本論文の構成、及び議論の前提が示される。

第二章では、「基礎づけ」関係のメタ形而上学的な応用として「新アリストテレス主義」という立場が導入され、基礎づけの理論の探究がさらに動機づけられている。まず第一節では、新アリストテレス主義的な形而上学観の骨子が説明され、そのうえで「クワイン主義」と呼ばれる立場からの反論が検討され、二つの立場の相違点の明確化に基づいて、クワイン主義が斥けられている。第二節では、「新マイノング主義」と呼ばれる立場からの反論が検討され、このマイノング主義の立場が用いる「存在」概念の不明確さが示され、この立場が斥けられている。

第三章では、基礎づけの理論の内的な整合性に関する問題が論じられている。特に、キット・ファインが提示した基礎づけ関係のパラドクスが検討され、その解決が図られている。まず第一節では、基礎づけに関するいくつかのもっともらしい前提からどのようにして矛盾が導かれるかが示されたうえで、そのパラドクスに対する既存の応答が検討される。それらの応答のいずれについても、パラドクスの誤った理解に基づくものであるか、不十分な解決しかもたらさないものであることが明らかにされる。第二節では、事実含意的な構文によって表されるタイプの原理に対して、形而上学的実質のなさを主張するデフレ的な解釈が与えられ、形而上学的説明と概念的説明という二種類の非因果的説明の混同によってパラドクスが引き起こされていることが指摘されている。最後に第三節では、前節で提示された新たな解決策に対してなされうる三つの反論が検討され、それぞれについて応答がなされている。

第四章では、基礎づけの理論とメレオロジー（部分-全体関係についての理論）との整合性に関する問題が論じられている。特に、世界のメレオロジカルな構造に関するある種の可能性と基礎づけの理論とが不整合をきたすと主張したジョナサン・タラントの議論が検討され、それに対する反論が提示されている。まず第一節では、第二節以降での議論のための準備として、事実どうしの間の基礎づけ関係と

対象一般の間の優先性関係とがどのように連関するかについてのテーゼが導入されている。次に第二節では、タラントの議論が論証の形で整理され、以降の議論において不問に付されるいくつかの前提について注意が促されている。続く第三節では、タラントの議論のうち「ガunkに基づく論証」と呼ばれる部分が検討され、誤った前提に基づくものとして斥けられている。具体的には、まず、タラントが提示する「ガunkな世界」（どんな対象も真部分をもつような世界）の可能性に疑いの余地があることが指摘されている。さらに、複数の対象を基礎的とみなす立場（多元論）と当該の可能性とが両立しないという前提が誤りであることが示されている。最後に第四節では、タラントの議論のうち「ジャンクに基づく論証」と呼ばれる部分が検討され、誤った前提に基づくものとして斥けられている。具体的には、まず、タラントが提示する「ジャンクな世界」（どんな対象もなんらかの別の対象の真部分であるような世界）の可能性と、単一の対象を基礎的とみなす立場（一元論）とが両立しないという前提が誤りであることが指摘されている。さらに、「ジャンクな世界」の可能性の想定における「存在」概念が両義的であり、可能な二つの解釈のうちのどちらを採用しても、当該の想定が論点先取の虚偽を犯すものとなるか、基礎づけの理論の擁護者にとって端的に受け容れられないものとなるかのいずれかであることが示されている。

第五章では、否定的真理の实在論的基盤をめぐる問題に取り組むための枠組みとして、真にするもの（truthmaker）の理論が擁護されている。まず第一節では、truthmaker原理に基づく实在論的な真理観が説明され、一般に「truthmaker原理」と呼ばれているテーゼが議論される。第二節では、truthmaker概念の有用性に対する批判が検討され、truthmaker概念の一般化に基づいてそれが斥けられている。続く第三節では、前節での議論に基づいてtruthmaker原理が再定式化され、「基礎的な存在者の探究」としてtruthmaker理論が捉え直されている。最後に第四節では、truthmaker理論に対する別の根本的批判として、「全面主義（maximalism）」に基づく批判が検討され、その批判が依拠する「truthmaker理論は全面主義的でなければならない」という前提の誤謬が明らかにされている。

第六章では、实在論的基盤をめぐる論争のなかで重要な問題と位置づけられている、「否定的真理のtruthmakerは何か」という問題が論じられている。まず第一節では、前章第四節での議論が踏まえられる形で、否定的真理の議論が位置づけられている。次に第二節では、否定的真理のtruthmakerとしてこれまで提案されてきた諸々の存在者に対する一般的な批判が検討され、形而上学的説明と概念的説明の混同に基づくものとしてそれが斥けられている。最後に第三節では、「あらゆる否定的真理のtruthmakerは世界全体である」という主張が擁護されている。具体的には、まず、「現実世界」をあらゆる否定的真理のtruthmakerだと考えるロス・キャメロンの提案に潜む不整合が、世界の事象様相的性質という観点から指摘されている。そのうえで、「現実世界」という語が指示しうる二つの対象の区別と関係づけによってその不整合が取り除かれ、世界全体の本質的性質の明確化に基づいたより洗練された立場が提示されている。

第七章では、論文全体の議論のまとめとして、各章での議論の要点が整理されたうえで、そこから一般的な結論が引き出されている。

審査要旨

世界の階層構造を形而上学的に説明する「基礎づけ」関係理論の重要性や諸問題は、現代の分析形而上学で盛んに議論されてきた。北村君は、代表的諸批判を含む先行研究に対して論理的で緻密な分析を与え、新しい独自の理論的補強を与えて「基礎づけ」理論を擁護することに成功している。

序論に続く第二章では、「基礎づけ」概念の役割を重要視する新アリストテレス主義の観点から、「存在量化」と「存在概念」の区別などの基本概念を精査することによって、クワイン主義的メタ形而上学理論と新マイノング主義形而上学理論の問題点を明確にしておき、評価に値する。

第三章では、「基礎づけ」理論にとって深刻なパラドクスとして知られるキット・ファインらの提示した一連のパラドクスに対して、新しい解決策を提出している。即ち、それらのパラドクスは異なる種類の非因果的説明を混同することから生じるものであり、その観点に基づけば一連のパラドクスは統一的に解決することができる、という新しい視点を北村君は提示している。特に北村君は、「形而上学的説明」と「概念的説明」という二種類の（非因果的）説明の区別を立てて、事実含意的な構文によって表される「基礎づけ」理論の原理が実は形而上学的実質を欠くものであることを指摘し、パラドクスの解消を図っている。こうした解決策は北村君独自のものであり、この分野で発展性のある考え方であると言える。

第四章では、基礎づけ理論と並ぶ、もう一つの重要な形而上学的構造理論である世界のメレオロジカルな（全体-部分関係の）構造の理論との両立可能性が、正面から取り上げられている。この章の議論も説得力を持つものである。特に北村君は、両者が不整合をきたすと主張したジョナサン・タラントの先行研究を綿密に分析している。そして北村君は、タラントの議論が、形而上学的一元論／多元論が何を含意するかについての誤った前提に基づくものであり、基礎づけの理論に対して脅威を与えるものではない、という主張を説得的に展開している。ここでなされている、形而上学的一元論が非原子論と両立するという議論、形而上学的一元論が非全体論と両立するという議論、さらに、「存在」概念の異なる解釈に基づいて、全体論的一元論とも両立するという議論には、高いオリジナリティを見出すことができる。

第五章で北村君は、**truthmaker** 概念の一般化を行い、**truthmaker** 理論を「真理と存在との関係に関する理論」としてではなく「基礎的存在者の探究」として捉えなおしている。この章では、「真にする」という関係を、前章までで扱った「基礎づけ」概念に基づいて再定義することにより、**truthmaker** 理論に新たな理論的根拠を与えることに成功していると言える。

第六章では、「否定的真理の **truthmaker** として提案されてきた存在者はいずれ

もある種の否定的真理に依存しているがゆえに認められない」という **truthmaker** 理論全体が直面してきた批判に対して、それが形而上学的説明と概念的説明との混同に基づくものであることを指摘し、否定的真理の **truthmaker** は世界全体であるという立場を明確に引き出す。この緻密な理論展開にはオリジナリティが認められる。また、世界の事象様相的性質に関してロス・キャメロンの提案が抱えている不整合を取り除くため、北村君は、「現実世界」という語が指示しうる二つの対象を区別し、両者の関係を「物質的組成 (**material constitution**)」という関係によって特徴づけている。この視点もまた斬新なものであり、そうした斬新な視点が、自身が基本的に同意する立場を安易に追認するのではなくその問題点をも厳しく指摘する姿勢からもたらされたものであることによって、説得力を同時に備えている。

著者北村君は、世界の階層構造について、還元でもスーパーヴィーニエンスでもない、我々の直観ともマッチする形而上学説明としての「基礎づけ」理論を探求することを目指している。しかし、そこにおいては、形而上学的説明の意味付けをさらに明確化することが、スーパーヴィーニエンスによる説明に対する優位性を示すためにも求められるように思われる。また、クワイン主義や新マイノング主義に対する批判においては、北村君は初めから新アリストテレス主義の立場に立った批判の範囲に止まっていることから、さらなる検討の余地が残ると考えられる。

また、北村君が示した **truthmaker** 理論の一般化は、基礎づけという観点からの **truthmaker** 理論の有効性を力強く立証しているが、一方で、元々是对応説的な真理概念を組み込んでいたはずの **truthmaker** 理論の实在論的側面を失わせかねないのではないかという懸念が残る。さらに、否定的真理についても北村君は初めから **truthmaker** 理論の枠内で議論を進めているが、そもそも否定に対して直接的な **truthmaker** 的基礎づけが必要かどうかという問題までもを含めると、解決の可能性がまだまだ拡がり得るように思われる。否定を本当に世界の非基礎的な特徴として扱うべきかどうかという点を含め、この問題についての議論はさらに展開する余地がある。またより内在的な観点から言っても、否定的真理の問題に対して北村君が本論文で与えた、「物質的組成関係に立つ二つの現実世界」という発想に基づく解決は、その斬新さが高く評価される一方、「種」としては捉えられないはずの「現実世界」に対し物質的組成の概念を適用するという点に関して、さらなる正当化が必要であろうと考えられる。

このようにいくつかの点でさらに検討を進めるべき課題はあるものの、北村君の本論文成果は高いオリジナリティと学術的意義を持っており、審査委員会一同は、本論文が本文学研究科の学位授与にふさわしいものであると判断する。

平成27年10月5日

審査委員会一同